

社団法人 建設コンサルタンツ協会 懸賞論文(学生論文部門)  
「日本の街は美しいですか」  
応募論文

## マチの暗黙知による「美しい街」づくり

氏名 : 松本 邦彦  
所属 : 大阪大学大学院工学研究科  
環境・エネルギー工学専攻(博士後期課程1年)  
懸賞を知った媒体: 学内に掲示されたポスター

## 1. はじめに

2005年の景観法制定に代表されるように、近年「景観」という言葉が非常によく使われるようになってきている。本論においても「美しい街」を考えるにあたって、まず「景観」という用語の定義を行いたいと思う。そもそもの景観という言葉の語源は、大正時代に植物学者である三好学がドイツ語の「Landschaft」に学術用語としての訳語を与えたものとされ、地理学の分野で「自然と人間界のことが入り混じっている現実のさま」を意味する言葉として使われてきた。しかし近年頻繁に使われるようになった、町並み景観・地域景観・自然景観・にぎわい景観などといった、無数の用法全てに対応した「景観」の解釈はなかなか見当たらない。そこで本論では、「景観」という言葉に対して、鳴海邦碩による「見える環境」という広い解釈を採用する<sup>1)</sup>。この解釈を用いることで、「見る」ことによって評価できる場所なら「ミクロ-マクロ」「自然-都市」「日常-非日常」などの様々な次元から景観を考えることが可能になり、多くの人が集う都心部や、観光客が集まる観光地などだけでなく、日常私たちが暮らす小さなスケールの場所も対象とすることができる。

用語の定義をした上で、今回の論文テーマである「日本の街は美しいですか」というものを考えてみるが、果たしてここで言う「美しい」とはいったい何なのだろうか。居住者にとってのものなのか、それとも来街者にとってのものなのだろうか。さらに、「美しい街」というのはどのようなマチ<sup>2)</sup>なのだろうか。以下では、このような「街の美しさとは何なのか」、「誰にとっての美しさなのか」という視点から述べ、自分たちが暮らすマチの景観をどうすべきなのかを考えていきたい。

## 2. 「街の美しさ」とは何なのか

「街の美しさ」と言っても、その基準は当事者によって異なる。では、その「美しさ」の捉え方の違いはどこから生まれてくるのだろうか。「美しい」ということについて、橋本治は以下のように述べている<sup>3)</sup>。

「美しい」とは、「合理的な出来上がり方をしているものを見たり聴いたりした時に生まれる感情」である

「美しい」という言葉で説明される感情は、実際には自分が持っている価値観との照らし合わせの中で「合理的である」と判断されるものであるという考えだが、これは「美しい街」また「美しい景観」というものを考える上でも同様であろう。つまり「美しい景観」というのは、「自分にとっての合理性が高い景観」ということが言えるのではないだろうか。また「良い景観」という言葉も日常的に用いられるが、これも「(自分にとって合理的で)良い景観」だと言い換えることができるだろう。

このことを、東京日本橋の景観問題を例に考えてみる。この問題は日本橋本来の景観を取り戻すために、橋の上を通過する高速道路を地中化しようという計画だが、各方面から様々な意見が出て大きな議論的となっている。東海道の基点である日本橋の歴史を尊重する人にとっては、その歴史を破壊する物として上部の高速道路は美しくない(合理的でない)存在である。一方で、日本橋の存在には目を向けず、高速道路の巨大な線形に美しさを感じる人や、時代を超えた二つの橋のコラボレーションの中に美しさを見出す人もいるだろう。このように「美しい景観」「良い景観」という判断は個人の価値観との関係の中で生まれるものなのである。

そして、このような個人の価値観に影響を与える要素として、居住者と来街者の違いは無視できないはずである。観光地などでは、大自然・伝統的な町並み・都会のにぎわいなどが、来街者にとっての非日常で貴重な経験となり、そこに合理性が生まれる。そして、それらは「美しい」「良い」という評価に繋がるのである。一方で、このような大多数の来街者の合理性によって美しさが規定される観光地においても、その場所で暮らし、来街者が非日常的だと感じる対象を日常的に経験している居住者の合理性というものも、当然ながら存在している。来街者が合理的に感じるものも、自然災害のリスクを伴う大自然・維持管理の大変な歴史ある建物・人の多さが生み出す夜間の騒音などのマイナス要因と相殺してみると、居住者にとっては必ずしも合理的だとみなされないかもしれない。もちろん逆に、何の変哲もない河川敷が「子供とよく散歩にいった思い出のある河川敷」になったり、何の変哲もない住宅が「仲の良い さんの家」となったりと、来街者よりも居住者の方がより合理性(美しさ)を感じる場合も考えられる。すなわち、「街の美しさ」について考えることは、必ずしも観光を考えることと同義にはならないのである。個々人がそれぞれに収支計算した合理性によって、それぞれの美しさが既定されているのである。

### 3. マチの暗黙知

2章では「街の美しさ」の構造が個々人の合理性によって成立していることを述べた。では、その「合理的だ」という感情を生むに至る過程で、最も重要な要素とも言える「マチの認識」はどのようにして生まれてくるのであろうか。各人の美しさ(合理性)の基準がそれぞれ異なっていることから、マチの認識も人により異なっているはずである。そこで本章では、「マチの認識」の構造を、暗黙知という概念を用いて説明していく。

暗黙知という言葉は、物理学者から社会学者へ転身した変わった経歴を持つハンガリー出身のマイケル・ポラニーという人物の説によるものである<sup>4)</sup>。彼は人間の知識には二つの種類が存在しているとしている。一つは一般的に用いられる知識で、これは明確に言語化が可能なものであり、彼はこの種の知識を形式知と定義している。そして、もう一方の知識としては、経験から獲得した信念や物の見方、価値観等、言語で表現できない要素によって構成された知識を挙げている。言語等によって他者に伝えるのが難しい潜在的な知識であり、これを暗黙知と定義している。わかりやすい言葉で表現すると、「本当は知識として自分の脳にあるのだけれども、自分がその知識の存在に気がついていない」という解釈ができるのではないだろうか。暗黙知と形式知の違いを、自転車の乗り方を例に説明してみる。乗り方は経験的に知っているけれども、その内容を他人に言葉で説明するのは困難である。「スピードを出した状態での右カーブの曲がり方」を言語化して説明する場合を考えると、「緩やかなカーブでは重心を傾ける」「急なカーブの場合はハンドルを傾ける」「ハンドルの傾け具合は一定ではなく、スピードやカーブの形状によって変化させる」といったように、その量がどんどん膨大になっていくことがわかる。このように実際にやってみたら簡単なことも、細かく全ての内容を言葉で表現するのは困難なのである。もちろん人間はそんな苦勞をしてまで言語化しようとも考えないので、そのような知識が自分の頭の中に存在することすら気づかない。多くの場合は、文章として表現された物を読むことや、他人からの指摘によって、「そう言われてみれば、そういう事だな」と、その知識の存在に気付くのである。自分の好きな女の子のタイプは経験的にわかっているのに、他者にその

内容を上手く説明できないことも同じ現象だろう。

そして、この暗黙知というものはマチの問題を考える上でも重要な概念ではないだろうか。すなわち「マチの暗黙知」というものが存在しているのである。これを景観の話題で考えてみると、自分が美しい(または美しくない)と感じる景観がある時には、「美しい」という顕在化された知識の存在は認識できるけれども、具体的にどの要素がどのように作用しているから「美しい」と感じるのかは言葉で説明しにくい。脳の中には、美しいと感じる認知構造が知識として潜在的に存在しているが、その知識の全てを言語化して説明できる人は皆無のはずだ。このように、ある景観に対して「美しい」などの感情を抱く時、その認知構造を構成する多くの要素は暗黙知によって形成されているのである。

また、景観を構成する多くの要素の中には、比較的容易に認識可能で形式知になりやすいもあれば、その存在に気付くことが困難で暗黙知になりやすいものも存在するだろう。暗黙知になりやすい要素は、他人に指摘されることや、急激な環境の変化によって初めて、形式知へと転換する場合が多い。近年、東京都国立市の大学通りや、大阪府箕面市山麓部でのマンション建設<sup>5)</sup>に代表されるように、全国各地で高層建築物の建設に端を發した景観論争が発生しているが、これらの問題を「マチの暗黙知」の視点から考えると、マンション建設という環境の急激な変化が景観に関する暗黙知を形式知へと転換させたと考えられる。国立の事例ではマンションのスケールの大きさが、「大学通りの美しさは、銀杏並木の高さを越えない建物が並んでいることにある」という、周辺住民にこれまでなんとなく実感(暗黙知として認識)されていた知識を、形式知へと転換させたのだろう。同様に箕面の事例でも、マンションにより連続する山並みが分断されることによって、「箕面の山並みの美しさは、山並みが連続していることにある」という知識が形式化されたのである。更には、これらの景観が周辺住民にとって、当然存在するものだと思われていたことで、これらに対して「良い」「美しい」といった認識すらしたことがなく、こうした「良い」「美しい」といった上位概念すらも暗黙知になっていたと考えられる。景観論争の発生により「言われてみれば、これまで自分も良い(美しい)と感じていた」という事実気付くのである。



図 大阪府箕面市の連続する山並みを分断するマンション

マンション景観問題に限らず、町家等の市街地において歴史的景観を構成する要素も、同様に考えることができる。周辺住民にとっては日常生活圏に存在する町家が、昔から当然のように存在しているために、「町家が地域景観価値の維持向上に貢献している」ということが暗黙知となってしまっていると考えられる。そのため、町家が取り壊されたり、第三者に良さを指摘されたりすることで、初めて気が付く(形式知となる)のである。以前筆者は兵庫県旧山崎町(現宍粟市)において、酒蔵などの酒造関連の歴史的な建物の景観評価を明らかにするために、周辺住民を対象にアンケート調査<sup>6)</sup>を行ったが、その際に寄せられた自由記述欄のコメントに以下のような内容があった。

「---略---酒造の建物があることを、当たり前で皮膚感覚で見ていたものを、(アンケートをきっかけに)改めて良いものではないのかと感じました。---略---

この地域で長年暮らしてきた回答者は、これまで酒造関連の建物がある景色を、「良い」ものとして認識していることに気が付いていなかったのである。しかしアンケートという外部刺激により、その暗黙知が形式知へと転換したのである。

以上の事からもわかるように、「美しい街」について考える上では、収集が容易な形式知として認識された意見だけでなく、潜在的な暗黙知として認識された意見も反映させていくことが必要なのである。そこで次章では、「マチの暗黙知」を実際に方策の中に取り込んでいく方法を考える。

#### 4. マチの暗黙知の掘り出しによる、地域で共有できる「美しさ」の見出し

本章では「美しい街」を考える上での、暗黙知の方策への取り込みについて考える。実際に「景観を良くしよう」と計画を練ってみても、3章で示したように、様々な事象に対する重要な認識が暗黙知として存在するため、結果として抽出が容易な形式知を中心に思考が進行してしまう。その結果として、「まちのゴミを拾いましょう」「まちを花でいっぱいにしましょう」といった一般的な方策が生まれがちになる。もちろん、これらの取り組み自体は評価されるものだが、地域景観の本質的な問題はもっと潜在的で、暗黙知として人々に認識されているために、問題と方策との間に距離を感じてしまうことが多々ある。そのため、本当に「美しい街」を考えるためには、マチの暗黙知を人々の頭の中から掘り起こし、形式知へと転換させていく過程が必要となってくるのである。

近年、住民参加型のまちづくりが盛んになっているが、住民が計画に参加することは暗黙知の掘り起こし作業をする上でたいへん重要な意義を持っている。なぜなら計画者側の行政やコンサルタントはプロであるけれども、実際にその場所に暮らす居住者以上に「マチの知識」を持っているわけではない。そのため計画者側には、地域景観に対して住民が形式知として抱えている知識の集約とともに、より本質的な問題を含むことが予想される暗黙知として認識されている知識の掘り起こし作業が必要とされるのである。実際に暗黙知の掘り起こしを進める上では、ワークショップ等の場において計画者側から「古い町家についてはどう思いますか」「農地がある景色はどう思いますか」「人が集まる賑わいのある風景はどう思いますか」というような、様々な評価の切り口を提示することで、暗黙知の形式知への転換を促す刺激を与えることが必要とされるだろう。また逆に、計画者側が暗黙知として認識している要素も、住民からの刺激による形式知への転換が期待できる。

2章で述べたように「美しい景観」とは「自分にとっての合理性が高い景観」であり、個

人の価値観との関係の中で規定されるものである。そのため「街の美しさ」に関する認識(暗黙知、形式知ともに含む)も、当然人によって大きく異なっており、居住者の意見を集約していくためには、各人の合理性(美しさ)のすり合わせが必要となってくる。そのためには、上記同様にワークショップ等の複数の人間が集まる場において、各人が地域景観に関して形式知として認識している内容を提示し、他者の暗黙知の掘り起こしを誘発させるとともに、提示した内容に対する意見交換から、自分と他者での合理性(美しさ)の基準の相違点・共通点を知ることが必要である。そして、この作業を繰り返すことで、暗黙知の形式知への転換が進み、また合理性に関する他者との相違点・共通点を知ることが、地域で共有できる価値観の創出に繋がるだろう。

このようにして居住者の地域景観に対する認識を集約し、それに基づく方策を文章化していく作業を行うのであるが、この過程においても注意すべき点がある。長年同じ地域で暮らし、ある一定の価値観を共有している人同士の場合であれば、限りなく暗黙知に近い漠然とした表現でお互いに納得し合えるかもしれない。しかし、来街者や外から移り住んできた人など、価値観を必ずしも共有できない場合には、どうしても形式化された表現によるコミュニケーションが必要となるだろう。その際に用いられる形式知は、「壁の色は白にする」「傾斜屋根をつける」といった限定的な表現で文章化してしまうことで、それらの表現が支配的になり、他の文章化されなかった要素を再び暗黙知化させてしまう危険性をはらんでいる。そのため、そうした事態を防止するためにも、多様な居住者の背景や価値観をベースとしたメタ情報を包含した表現が必要とされるのである。大阪市の旧平野郷HOPEゾーン事業では「祭りちょうちんの似合うまちなみ」が景観づくりのスローガンとされている<sup>7)</sup>。外壁の素材、軒の高さ、瓦の仕様などのガイドライン単純に文章化したものも存在するが、「祭りちょうちんの似合うまちなみ」というキャッチコピーが、居住者が共有する価値観をベースに作られており、ただ「ちょうちんが似合えばよい」という限定的な意味だけでなく、より高次のメタ情報を包含した形式知になっているのである。こうした工夫により、文章化による情報の喪失を防ぐことができるのである。

以上のように、実際の景観づくりの中に「マチの暗黙知」を取り込んでいくためには、暗黙知を掘り出し、地域で共有できる合理性(美しさ)を見出していくこと、そして得られた情報を文章化する過程において、貴重な情報の喪失が無いよう細心の注意を払うことが重要であることが明らかになった。

## 5. おわりに

アレックス・カーは、日本の経済システム・文化・景観などの喪失に対する国民の感情を、ゆでガエルに例えている<sup>8)</sup>。熱湯に放り込まれたカエルは、その刺激によりなんとか現状を打破しようと必死になる。しかし、水に浸かったカエルは水ごと温められると、周りの状況の変化に気付かず、ゆでガエルになってしまうという。ぬるま湯に心地よく浸かっているうちに、背後で起こっている重要な事実気付くことができず、取り返しのつかない状態になってしまうという例えである。このゆでガエル同様に、現状のマチの景観の変化をただ漠然と眺めているだけでは、地域景観を暗黙知のみでしか認識できない。そのため「マンション建設により山が見えなくなった」「ある日突然町家が取り壊された」等といった回復不能な状態になって初めて、地域景観におけるそれらの要素の価値に気が付くの

である。自分たちが暮らすマチの景観をどうすべきか、熱湯になってしまう前に「マチの暗黙知」を掘り起こして考えていかなければならないだろう。

#### 補注および参考・引用文献

- 1) 鳴海邦碩編(1988)『景観からのまちづくり』学芸出版社 p7
- 2) 本論においては、ある一定の空間のまとまりを示す「町」「街」「まち」、また「都市」「地域」「地区」などの多様な用語全てを包括的に表現する用語として「マチ」を用いている。
- 3) 橋本治(2002)『人はなぜ「美しい」がわかるのか』筑摩書房 p14
- 4) マイケル・ポラニー(1980)『暗黙知の次元 言語から非言語へ』紀伊国屋書店
- 5) 大阪府箕面市如意谷の山麓に建設予定であった高層マンションに対して、山なみ景観を阻害するとして住民が反対運動を展開し、裁判を起こすが住民側の敗訴となる。
- 6) 松本邦彦, 鳴海邦碩, 澤木昌典, 岡絵理子「伝統的産業と景観の関係性に関する研究 - 兵庫県山崎町の酒造業を事例として - 」日本建築学会近畿支部研究報告集第 44 号・計画系(2004)
- 7) 大阪市立住まい情報センターHP(Date2006.09.29)  
<http://www.sumai.city.osaka.jp/hope/hirano/hirano.html>
- 8) アレックス・カー(2002)『犬と鬼 知られざる日本の肖像-』講談社 p369-370